
忍風自衛隊

鎌足大

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

忍風自衛隊

【コード】

N8080D

【作者名】

鎌足大

【あらすじ】

自衛隊訓練生を迎え入れた東部方面隊第2旅団・第87補給地が基地・車両・隊員と共に別の世界へと飛ばされてしまった。

プロローグ（前書き）

この小説は漫画『NARUTO』の世界の過去の話として書いてお
ります。

なお時代背景は木ノ葉創設期 初代火影が木ノ葉を創立させ
た頃の時代です。

プロローグ

2008年8月上旬、東部方面隊の管轄下にある第87補給基地。ここに駐屯するのは第2旅団司令部下第31普通科混成中隊の防衛によつて守られていた。

そして今日は、その補給基地に訓練生たちの後期配属でこの基地に駐屯している中隊の配属となった。

「また厄介な連中が来たな」

そんな愚痴を漏らしたのは、基地防衛部隊の第1小隊長の森本吉宏二尉だった。

彼がこの基地の小隊長としてきたのはちょうど3年前。彼は当時西方面隊の野戦特科小隊長補佐の役職についていたのだが、上司と意見の食い違いで左遷されるようにこの補給地の小隊長となった。しかし彼は別に後悔はしていなかった。

この小隊に配属されてから、今までデスクワークばかりの仕事であった彼の生活が一変してロードワークの仕事が多くなり、元々運動が好きで彼にとってはこの基地はどんな高級リゾートより高級に見えるのだ。

「久しぶりだな、森本二尉」

森本に話しかけて来たのは、訓練学校で教鞭を勤めている藤堂雷太准陸尉だ。

高校から自衛隊入隊まで同期で過ごしてきたが、30を過ぎた頃から森本は戦闘小隊へ、藤堂は士官学校で自衛官候補の育成と別々の道を歩み始めたのだ。

「今日からお前の小隊に配属される事となった隊員だ」

「普通科所属、成田敏雄一等陸士であります！」

「同じ、石田光男二等陸士です！」

「航空科パイロット候補、三国小雪陸士長です」

何人かも挨拶をしたが、その中で特に元気があったのはこの3人だ

った。

「ようこそ第87補給地へ、俺はお前らの面倒を見る小隊長の森本二等陸尉だ。これから4ヶ月間お前らをミツチリ鍛えてやる、俺の仕事はお前らを一人前にする事だ」

すると空が騒がしくなる。先ほどまで晴れ晴れとしていた空が、急に厚い雲に覆われて雷も鳴り出した。

「たく、今日の天気は晴れじゃなかったのか？毎朝目覚ましテレビで確認取ってるのに・・・」

森本が言いかけた次の瞬間だった。

突然大きな雷が基地に向って落ちてきた。落雷したと思ったら今度は突然光が補給地全体を包み込んだ。

「な、何だこれは!？」

突然の事で隊員たちは動揺する。次の瞬間、音が聞こえなくなった。

2008年8月4日、14:48に第87補給地との連絡が遮断された。様子がおかしいと思った近場の駐留部隊が調査に向ったところ、第31普通科混成中隊ごと補給地が綺麗さっぱり更地となっていた。

プロローグ（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。
今後も踏ん張って書いていきたいと思います。

きの巻…ここはどこだ…？（前書き）

いよいよ始まる本編

果たして自衛官たちの運命は…

本格的に死人が出ます。

見たくないと言う御方は直ちに退去をお願いします。

巻の巻…ここはどこだ…？

最初に目覚めたのは補給地の中で食堂でコーヒーを飲んでいた中隊長の伊瀬勇太二等陸佐と、副官の五十嵐修哉一等陸尉の2人だった。突然の落雷の音で驚いたと思ったら、今度は正体不明の光に包まれていた。

「五十嵐、いったい何があったんだ？」

「自分にはわかりませんが、でも一旦外の様子を見ておいたほうがいいです」

2人は急いで外に出ようとすると、他の部屋からも気を取り戻した隊員たちがぞろぞろと出てきた。

「伊瀬中隊長、五十嵐一尉、ご無事だったんですね」

声をかけて来たのは、第2小隊の桜庭義明二等陸尉だ。偶然にも仮眠室で休憩を取っていたので、誰よりも早く気がついたのは彼だろう。

「外は濃い霧が覆いつくしています」

「霧だと？今朝は霧はおるか雲1つすらなかったのに…」

とりあえず3人は外に出てみる。外は濃い霧で覆われているが、だんだん視界が晴れていく。霧が完全に晴れると、周りには見た事もなく木が密集していた。

「どうなってるんですかこれは!？」

「…道路もなくなっている。無線室で通信を」

無線室

「こちら第87補給地、〇〇四聞えるか？〇〇四!」

「大河内、どうした？」

通信を行なっていたメガネをかけた士官、大河内雅治准陸尉が不安そうな顔で答える。

「外部との通信がつながりません。内無線はできますが、外部との

通信が一切途絶えました。携帯や公衆電話も試しましたが、全く繋がりません」

「馬鹿な・・・」

「館内放送を使わせる」

伊瀬はマイクを取って館内の放送をオープンにする。

『館内にいる全職員に告ぐ！総員直ちに外に出て各小隊・班ごとに整列せよ！繰り返す・・・』

館内放送を聞いた隊員たちは一斉に外に出て隊列を組んだ。その中には森本小隊も含まれていた。

「森本、生きていたか！」

「そつちも生きていたようだな桜庭」

「館内にいたから助かったぜ。・・・お前外にいたんだよな、何があつた？」

「わからん、突然光に包まれたと思つたらその場で倒れていたんだ」
「そうこうしている内に、各小隊の点呼がすんでメガホンを持った伊瀬と五十嵐が出てきた。」

『諸君！ここがどこだかは私には検討がつかん、そこで危険ではあるが周辺2キロの範囲で搜索部隊を出す事にした。何も有力な情報をつかめなくても1時間後には帰還しろ、以上だ！』

各班と小隊で割り当てを決めて搜索の準備を行なつた。

「鍋島と後藤、そして新米の男2人はジープだ。三国は航空科でへりは使えるが今は飛ばせん、別命有るまで待機だ」

成田と石田が装備の確認をしていると、小雪がうらやましそうな視線で2人を見つめる。

「そんな捨て犬のような目で見られても行けないモンは行けないんだぞ」

「分かつてるわよ、アンタ達は2人とも普通科なんだし、でも偵察なら空からやったほうが適任よ」

「昼間は危険すぎる。訓練学校でもそう習つただろ？」

「昼間に偵察する事だつてあるわよ」

「ぶーぶーと文句を言いながらも森本二尉の命令どおり待機することにした。彼女はまだこういつた場面などでへりを飛ばした事は無い、だから尚更がっかりなのだ。」

「その代わり吉報はちゃんと持って帰ってくるからそうむくれるなよ」

2人がジープに乗ると、早速森に向って発進した。

森の中は木々が覆い茂っており、その中では得ている大木はどれもゆうに全長100mを超えるものばかりであった。

「こんなデカイ木が日本にあるわけがないですよ。だってどれもギネス記録級の高さがありますよ」

「しっかしほとんど獣道だな・・・いったい俺たちはどこに来ちまったんだよ」

ジープを運転する後藤彰人一等陸曹はこの隊に配属されてもう10年以上も経つベテランだが、彼の人生で今までこんな事は一度もあるはずがない。

「目立つもんは特に落ちて・・・」
ドスッ！

木の上から何か落ちてきた。ジープの荷台に落ちたソレは、無残にもボロボロにされた死体であった。

「う・・・うわあああああ！！！！」
「新米、落ち着け！」

助手席に乗っていた鍋島柱木陸曹長が身を乗り出して2人をなだめようとする。

「とにかく収穫はあった、これより基地へ帰還する。後藤、無線で補給地に連絡しろ、木の上から死体が降ってきたってな」

ジープが通り過ぎるのを木の上で誰かが見ていた。黒いマントを羽織、垂れ下がっている前髪の奥に見える瞳は赤く輪がかかったような色の瞳。

成田たちが持ち帰った死体を補給地で検証する。手持ちの持ち物は胸のベストには巻物のようなメモがいくつかと、腰につけていたバツクの中からは『爆』と書かれた赤い札と小冊子のようなものがあつた。

「コイツはまるで忍者だな、足についているホルダーには手裏剣にクナイ、ほとんど自分が忍者ですって言っているモンだよ」

森本が死体の顔に白い布をかぶせて手を合わせる。死体は補給地の裏手にある雑木林に埋葬する事になった。

「ところで戻ってきた偵察部隊はこれで全部か？」

「いえ、桜庭小隊の若い連中がまだ戻ってきてません」

「アイツラいつたいどこで油を売っていやがるんだ。もう1時間半も過ぎてるぞ」

帰還せぬ部隊のことを考えていた次の瞬間だった。入り口のほうから桜庭小隊の隊員たちが全力疾走で走ってきた、その後ろからはマントを着込んだ集団が隊員を追ってきた。

「た・・・隊長！助けてください！」

逃げていた隊員が集団の放ったクナイと手裏剣の餌食になり、最後にとどめといわんばかりに首をクナイで斬られた。

「清川！この野郎！」

仲間の敵を取ろう集団に突っ込んでいくが、先ほど成田たちのジープを覗き見ていた男が目の前に立つ。素早く手で印を結んで口が大きくなる。

「火遁・豪火球の術！」

口から火の玉を放ち、隊員を焼き払う。

「野上さん！加藤、ジープ出せ！」

ジープに乗った桜庭小隊の2人が集団に突っ込む。

「清川さんと野上さんの仇だ！」

ジープに搭載されている機関銃MINIMIを放ち、集団の2人を撃ち殺す事ができた。

「危険だ、一旦引くぞ。鷹波、起爆クナイだ」

赤い瞳の男が危険を察知して部隊を退却させた。しかし隊員たちはまだ銃を撃ち続けている。

集団の1人が赤い札を貼り付けたクナイをジープに向かって放つ。「そんなちやちなモン通用するはずが・・・」

しかし、クナイはジープのフロントガラスを突き破って運転席に座っていた加藤の頭に刺さった。更に札が爆発してジープが隊員諸共吹き飛んだ。

「今川・・・加藤・・・」

「・・・この札に爆波能力が備わっているとはな」

伊瀬が持っていた札を破り捨てる。風が舞って破られた札が飛ばされていく。

自衛官が4人も殺された。

「倉庫にしまつてある偵察警戒車も出せ！74式と90式で補給地の正面を固める！」

いきなりの襲撃のせいか、自衛官たちの警戒心が一層強くなって今まで使う機会がなかった戦闘車両を全て出撃させた。

「補給地より1キロ圏内のセンサーの設置が完了しました。これでいつやつらが襲撃してきても発見できます」

「ご苦労。日が傾き次第すぐさまへりを出す、この周辺の情報だけでもつかみたい」

「しかし中隊長、先ほどの攻撃でへりの操縦士2人を失いました。このままではへりを出せま・・・」

「私がやります！」

小雪が自ら名乗り出た。確かにもう残っているへりの操縦経験者は、彼女を含めて森本小隊の金本裕也一等陸曹と萩本忍二等陸曹しか残っていない。

「これ以上貴重なベテランを失うわけにはいきません、お願いしま

す」

「……わかった。その代わり俺もついていく、新人2人と桜庭も来い！」

すぐさま倉庫に保管されていた多用途ヘリUH-1Jを起動させ、偵察を行なう。

「周りはほとんど森だな。町一つない……」

「ち、地形は我々のいたところと大差はありません。この辺は地図上で言えば神奈川です」

すると巨大な城が見えてきた。黒い瓦を並べた豪華な城で、天守閣には鯨が対になって並んでいた。

「嘘だろ……風格は違いますが、あれは江戸城です！」

「馬鹿な……江戸城はもうずいぶん前になくなったはずじゃ……」

城の中にいた足軽たちが槍や弓を構えて騒ぎ始めていたのを双眼鏡で発見した。ヘリは天守閣すれすれでUターンして引き返した。

「な、何だ……あの空を飛ぶ船は……!? 葭島、岳蔵を呼べ……!」

初めてヘリを見た城の城主は、余りの出来事に腰を抜かした。

引き返してきた森本小隊は、早速上空からの捜査の報告を伊瀬に通達した。

「江戸城のような城、忍者の様な装束を纏った集団……俺たちはいったいどうなっちまったんだ？」

「とにかく警戒はより一層強めた方がいいと思います。このままここで溜まっているだけではいずれ攻められるかもしれませんね」

五十嵐がすぐさま助言をする。リーダーがおたおたしては隊全体の不陰気が悪くなってしまうからだ。

「各小隊・班に食事を取らせろ、今日は疲れた」

伊瀬の命で全員は食事を取ることとなったが、皆余り食事がのどを通らなかつた。

今日だけで4人も仲間が殺された。皆お通夜の様な顔で細々と食事を取った。

翌朝、隊員たちは警戒発生のサイレンで叩き起こされた。何者かがこの補給地に近付いているのだ。

「敵襲ッ！敵襲ッ！」

隊員たちは大慌てで着替えを済ませて小銃を取り、各車両の搭乗や攻撃態勢を済ませる。正面の門から馬が走ってきた、それに跨っているのは昨日この基地を襲った忍者の様な集団だった。

「あいつらか？」

「ああ、あいつらに俺の小隊の連中を2人やられた」

「マダラ、あれほど先制攻撃を仕掛けるなと言っただけだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

先頭の馬に跨っている2人が話していると、伊勢がメガホンを持って前に出た。

『お前らは何者だ！？俺たちは陸上自衛隊・東方面隊第2旅団司令部第31普通科混成中隊だ！俺は中隊長の伊瀬勇太二等陸佐、この隊の責任者だ！』

「陸上自衛隊？」

先頭の馬に乗っているロン毛の男が馬から下りて近付いてくる。

「俺たちは怪しいものではない！俺たちは火の国を渡り歩いてる『木ノ葉』と言う旅の忍だ！昨日はすまなかった、俺の部下がお前たちの仲間を殺してしまったのは謝る」

おそらくこのロン毛が集団の頭であろう。

（旅の忍？ここは日本じゃないのか？）

隊員たちがそれぞれの考えを交差する中、一度小銃をおろす。

忍風自衛隊

きの巻・じじはどじだ・・・？（後書き）

ついに登場した謎の忍者集団。

これからが波乱の幕開けである。

式の巻：火の覚悟（前書き）

突如現れた謎の忍者集団『木ノ葉』
果たして彼等は敵か味方か？

忍風自衛隊

式の巻：火の覚悟

奇妙な空気が流れる中、ロン毛の男と伊瀬がそれぞれ前に出た。

「お前がああの集団の頭か？」

「いかにも、流浪忍隊『木ノ葉』忍頭の津波だ」

「では津波殿、ここはいつたいたいどこなんだ？」

「・・・？ここは火の国の中央だ。俺たちは火の国の大名の許可を得てここに俺たちの里を作ること許可された」

わけの判らないことを言われて伊瀬が少々混乱する。

「つかぬ事を聞くが、今は何年だ？」

「・・・どう言う意味だ？」

すると伊瀬はハツと我に返ってこの状況はまさかと思った。

「まさか・・・俺たちは次元を超えて・・・違う世界に来てしまったのか？」

だとすれば事の合点がつく。この世界は自分たちのいた世界とはまるきり違うベクトルを歩んできて、なおかつ忍や大名が力を持つ世界に来てしまったのだろう。

「事情はよく判らんが、我々は直ぐ側の森を開拓して里を興す」

「里？」

「この世界には今5つの国に4つの忍里がある。北西の土の国にできた『岩隠れの里』。水の国の島々で霧に囲まれた『霧隠れ里』。

南に位置する風の国が昨年立ち上げた砂漠地帯にある『砂隠れの里』。北の雷の国の『雲隠れの里』。そしてこの火の国にも我等木ノ葉が立ち上げる『木ノ葉隠れの里』がとうとうできるんだ。忍は自国の大名の依頼をこなして忍里の利益をつくり里を大きく育てていく。俺はこの地で里を興しどの忍里にも負けぬ素晴らしい里にしたいんだ！」

それが後の初代火影の名を掲げる彼の当初の理想であった。この後木ノ葉大きく繁栄し、初代の孫もいずれ5代目火影の名を受け継

ぐのだ。

すると伊瀬は津波にこう言い放った。

「それがお前の理想なら・・・里の住人はお前の守るべき存在だ。俺たち自衛官も元の世界では自国の国民を守るために存在している、俺たちに危害を加えるのなら・・・お前たちを容赦なく叩くつもりだ」

腰のホルダーから9mm拳銃を取り出して津波に向ける。

「・・・良からう、それでは俺達は里を興すので失礼する」

木ノ葉忍軍はぞろぞろと撤退していった。隊員たちはホッと胸を撫でおろして安殿息をつく。

「全員持ち場に戻れ！装備の点検と各車両の整備、それと森本小隊は俺と一緒に来て来い、連中の様子を見に行く。あの指揮は五十嵐に任せる」

木ノ葉忍軍たちは手持ちの斧で木を切り倒していた。

忍術を使って周辺の森を焼き払っても良かったが、近くに自衛隊の補給地があるのでそれを断念して力作業を行っていた。

「しっかし火遁の術を使えばこんな森焼き払えるのに、何で忍者の俺たちがこんな力仕事しなきゃいけないんだよ!？」

若手の中忍がぼやく。

「仕方ないだろ、近場に人がいるから不用意に術が使えないんだっ
てお頭が言い張るんだからよ」

「津波様も人が良すぎるぜ。元々俺たちも土地になるはずのところ
に急に現れた連中なんか追い出しちまえばいいのに」

今まで過酷な旅路を歩んできた木ノ葉忍軍にとっては、せつかく
自分達の故郷と言っべきものができたところに横槍を入れられたよ
うな気分でした。

「広さはこれぐらいでよからう、皆下がれ」

津波の声で忍たちが後ろに下がる。

「木遁・四柱家の術！」

すると地面から巨大な木が生えてきて、大きな木造の家となった。津波が得意とする木遁忍術は片方ずつに水と土のチャクラを練り、合成して発動させる。いわば血継限界と呼ばれる術の事だ。

「すごいな！お前たちの忍術は家も建てれるのか」

術の最中に到着した伊瀬達は、木ノ葉忍軍の忍術を見て驚きを隠しきれなかった。彼らは忍術と言うものをはじめて見たからだ。

「伊瀬殿か、ここへ何をしき来た？」

「いずれにしてもお前たちの土地に俺たちが勝手に来ちゃった事だし・・・お前たちに敵意はないという証拠に手伝いに来た」

ジープに続いて、大型のレッカ車が到着した。初めて見る巨大重機に木ノ葉忍軍の忍は舌を巻いた。

「こ、こんなデカイ鉄の塊が馬もなしに動くなんて・・・」

「スゴイだろう。お前ら、倒れてる木を切り分けて材木にするぞ！」

すると隊員たちがいつせいにチェーンソーで木を切り分け、ちようどいい大きさに次々と切り分けていった。

「これが・・・別の世界の人々の知恵の固まりか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

昼頃、大体の木材が完成し、一同は一旦昼休みをとることにした。

「手伝ってくれた御礼だ、その川で釣った魚だ」

豪快にも、木の枝に直接刺さった焼き魚が隊員たちに配られた。

香ばしい香りが辺り一面を包み込む。

「中々美味しいな。俺たちの飯も食ってみるか？」

伊瀬が津波の前に缶詰のウインナーを差し出してみると、津波は首を横に振った。

「我々忍は他人・・・仲間でない者の施しを受けないのが掟だ。心遣いは感謝するが、貰うのは気持ちだけでいい」

「・・・そうか、忍者つてのも大変なんだな」

そう言い残してウインナーを頼張る。

「中隊長！」

慌てた表情で森本小隊の隊員がかけ寄って来る。

「先ほど無線の連絡で基地南1キロの地点に侵入者、現在ヘリが偵察に向っているとの事です」

「何だと・・・津波、すまないが俺たちは一旦補給地に戻る」

「急いで行ってやれ！俺たちも後から援護で向う」

助かる！と一言残して、伊瀬と森本小隊の一同は大急ぎで補給地の方へと戻っていった。

「敵襲ッ！敵襲ッ！」

「たく、今日はこれで2度目だぞ！」

本日2度目となる敵襲で周りの隊員たちがあわただしく応戦の用意をする。基地の入り口を戦車と装甲車で固め、前衛に機関銃搭載のジープと偵察警戒車を出撃させた。

「敵との距離は？」

「おそらくこの基地から約500m地点だと思われます」

『総員第一級戦闘配備！繰り返す、総員第一級戦闘配備！』

偵察に向っていたヘリが帰還すると、今度は大勢の武者と足軽が基地の正面に現れた。掲げる旗には『火』と大きな文字を掲げている。

武者たちが道を開け、鎧を着込んだ中年の武者と若武者が前に出てきた。

「我は火の国大名、桜華火之国守松征に仕えもつす岳蔵セイゾウと申す！」

「同じくセイゾウ殿配下、巖島ハルノブと申す！」

「・・・なりは侍だが、そんな武将はいたか？」

「いいえ。自分歴史には強い方ですがそんな武将は聞いたことがありません」

自衛隊たちが警戒する中、セイゾウは話を続ける。

「お主たちは雷の国の大名の手のものか？それとも雲と同盟を結んでいる土の国のものか？」

「雷の国？土の国？・・・メガホンを貸せ」

五十嵐がメガホンを受け取り、火の国の軍勢に呼びかける。

『俺たちは怪しいものではない！自分は陸上自衛隊・東方面隊第2旅団司令部第31普通科混成中隊副官の五十嵐修哉だ』

「陸上自衛隊？・・・そんなものは耳にした事もないわ！」

すると軍勢の後方の方が騒がしくなる。ジープに乗った伊瀬と森本小隊が戻ってきたのだ。足軽を掻き分け、無事補給地のジープが到着した。

「五十嵐、遅くなってすまなかった」

「隊長！」

「・・・あなたがこの軍勢の大將か、中隊長の伊瀬勇太二佐だ。俺たちは別の次元から飛ばされてきた別の世界の人間だ」

するとセイゾウの顔が険しくなる。

「別の世界？・・・そんな事が信じられるものか」

「なら俺たちのこの装備をどう説明する？この世界にはないものばかりだ」

確かに伊瀬たちの保有する装備は火の国は勿論、他の諸外国の軍備とも違うし忍の扱うものでもない。

セイゾウは馬から下りて伊勢の目をマジマジを見つめる。

「・・・その目は嘘をついている目ではないようだな。武器を下ろせ！」

その一声で足軽たちは槍を下ろした。今度は伊瀬が乗っていたジープの方に近付き、そつと車体に触れてみる。

「このような乗り物を見たのも初めてだ。お主たちの言う事は信じてもよさそうだな、しかしこの土地は既に流浪忍軍の木ノ葉に引渡し・・・」

「その心配はございません」

旋風とともに、津波が現れた。他にも何人かの忍も一緒であった。瞬身の術で大急ぎで駆けつけたのだろう

「彼等と我々は利害を一致させた土、つまりは火の国に与する者たちです」

「津波……！」

「伊瀬殿、少し黙っていてくれ。彼らの身柄は我々木ノ葉が預かります、隣国と衝突するような事になれば我々と共に戦います」

知らぬ間にトントン拍子に話が進み、その場は丸く収まった。

「先の話が本当であれば……火の国は向こう100年は安泰だな」
セイゾウはそう言い残して軍を引き上げさせた。残ったのは木ノ葉の忍と自衛隊だけであった。

「俺たちにどうしろというんだ津波！」

「あのまま緊迫した状態が続いたら間違えなくお前たちは力と力がぶつかり合って互いに多大な被害が出るのは見てわかったはずだ。お前たちの世界ではどうなのかは知らん、しかしこの世界に残るのならそれなりの覚悟を決めておけ、戦わずして死ぬか、戦って生き残るかの覚悟をな」

そして木ノ葉忍軍もその場から退却した。

戦わずして死ぬか、戦って生き残るかの覚悟 その言葉は

この世界のあり方をそのまま表現しているものであった。

その夜、補給地で自衛隊の特別緊急会議が開かれた。

会議といっても、補給地の外で集まっている様だけであった。

重苦しい表情を解いた伊瀬は隊員たちにこう叫んだ。

「俺は……この世界で生きる覚悟を決めた！」

「隊長！」

隊員たちが戸惑いながら焦りを見せる。

「昼間……津波殿が言ったようにいざれ俺たちもこの国同士の戦

いに介入しなければならぬ……お前たちは温い平成の世界に戻りたいのか？俺はゴメンだ！俺はこの世界で、勝利を勝ち取って平和を模作する。戦いたくないものはここを離れて他の土地で暮らすがいい、しかし俺と共に勝利を勝ち取りたいものは……俺と一緒に来い」

伊瀬の演説が終わると、ほとんどの隊員が立ち上がった。そのも
のたちは自分の階級章を破り捨て銃を手に取った。

「……ありがとう、明日の早朝に津波たちと共に火の国の大名のところに行く。俺たちと共に行かない者は明日近くの村まで送り届ける事にする」

隊員たちはいつせいに動き出して装備の点検をしたり、荷物の整理を始めたりする。明日の朝には彼等は生まれ変わるのだ。

早朝、伊瀬は木ノ葉の忍が寝泊りしている場所へ1人で赴いた。
津波と話をつけるためである。

「覚悟を決めたか……鷹波、暫らく留守を頼む。御上にこやつ等を紹介してくる」

「兄者、こいつらの言うことを信じていいのか？」
津波の弟であり、後の二代目火影でもある鷹波は自衛隊の大して
いまだ警戒心を持っている。

別に信じていないわけではない、しかし彼等を最初に遭遇した際
に仲間2人を殺されたときの事を彼はまだ忘れていなかった。彼も
その時の小隊にいたのだ。

「マダラ、お前は彼らの言葉を信じるか？」

うちはマダラ、うちは一族の創設者であり最初に『万華鏡写輪眼』
を開眼させ九尾を手なずけた男。後に『暁』を組織させる。

「……それを決めるのは忍頭であるお前が決める事だ。し
かし友人として言わせて貰う、もしお前に危害を加えるようならこ
いつらは1人残らず俺が始末する」

友人である津波の友情に誓っての事であろう。

しかし彼と津波も数年の後に対決する運命にあることはまだ誰も知らない。

「とにかく俺はこいつらのことを信じてみるさ。話は済んだ、大名のところまで案内はするが忍でないお前たちの足取りでは2日ほどはかかるぞ」

「フフ・・・俺たちを甘く見るなよ、大名の所までは空を飛んでいく」

すると外が騒がしい、風を切るような音を聞いて忍たちが外へ出ると広場の中央に何かが着陸した。自衛隊の多用途ヘリUH-1Jだ。

「これは・・・先日大名の城を飛び回っていた鉄の鳥・・・」

「ヘリコプターって言うんだ。俺たちの世界の空を飛んでいる乗り物だ」

『中隊長、トラックで除隊した10名を近くの村まで送り届けました』

多用途ヘリからの通信で状況を確認した伊勢は津波と数名の忍と共にヘリに乗り込んだ。

「それでは暫らく里を任せる！」

忍たちに見送られる中、ヘリは空高く舞い上がり大名のいる城へと飛んでいく。

火の国・紅蓮城

「木ノ葉の里より速達の伝書鳩です。『我、自衛隊ト共ニコチラニ向カウ 木ノ葉忍頭 津波』これは木ノ葉の忍の伝書鳩ですから確かなものです」

この城の主であり火の国の守護大名である桜華松栴が畳に座りながら自衛隊の到着を待つ。

先日この城の上空を飛んでいた空を飛ぶ船がこちらに向かってい

るという情報を聞いてからはその正体を確かめたいと考えていたのだ。

「殿、例の空飛ぶ船が城下の側に林に下りました」

「そうか、兵を率いて様子を見に行かせよ」

城の近くの林に着陸した多用途ヘリから津波と伊瀬、そして護衛についてきた木ノ葉の中忍2人と成田と後藤がヘリから降りた。

「しかし空を飛ぶとは余り快適なものではないものだな・・・」

「慣れれば平気だが、生まれつき苦手な奴もいるからな」

ここから先は歩きとなるので仕方がないと思つた矢先、向こうから小規模の集団が詰め寄ってきた。

「隊長！」

「待て、あの先頭にいる奴・・・」

戦闘の馬に跨っている男の顔に見覚えがあつた。先日補給地に軍隊を連れて来た岳蔵セイゾウだ。

「岳蔵殿！」

「おお伊瀬殿であつたか・・・この鉄の鳥はもしや・・・！」

「脅かして悪かつたな、これは俺たちの世界の空を飛ぶ乗り物だ」
馬から下りてヘリの周りを見ている。ふと操縦席に座っている小雪の存在に気付く。

「この娘がこの鳥を操っているのか？」

「うちの新兵だ、なりは女だが中身は男勝りだぞ」

「それは余計です！」

小雪がヘリから顔を出して頬を膨らませながら怒る。

「殿が首を長くされて待つている、良ければ我等の馬に乗るといいぞ」

「それは助かる。お言葉に甘えさせていただくよ」

木ノ葉の忍者を除いた自衛官が彼らの乗る馬の後ろに跨る。

ヘリには念のために擬装用のネットを被せて一目見た位では判らない様にした。

「それでは行くぞ！」

馬を走らせながら一同は城を目指す。それを見た人々はその軍勢よりも馬の後ろに跨っている自衛官やその側を歩いている忍者に興味を示していた。

「なんだか俺たち見世物にされているような気が……」

「気のせいだ。回りの判断ばかり気にしていると良い兵士になれないぞ」

後藤が成田の言葉に相槌を打ちながらも回りに見える景色を見る。江戸時代のような町並みを想像していた彼の目に映っていた町並みは、自分達の世界の町並みと入り組んでいる事に内心驚いていた。電気で光る赤い提灯、スナックの立て看板、ラーメン屋の暖簾、自分たちのいた世界で見慣れたものが多数この城下町に存在していた。

巨大な木製の門が開き、集団はその中に入っていく。

「着いたぞ。ここが我等が守護大名、桜華松証様の城である紅蓮城だ」

「……紅蓮城」

自分達の世界にかつて存在した江戸城のような風格を醸し出す様な立て様式。堀の中に溜められた水の上には何隻かの小船が走っている。

「着いて来い、殿はこの城の玉座の間におられる」

「お前らは暫らくこの辺で待機している。俺と津波だけでいく」

「お気をつけて」

後藤と成田と小雪は伊瀬に敬礼をして周りの散策を開始する。

セイゾウに連れられて城内を歩き回る事10分、ようやく玉座の間に着した。

「失礼します。例の自衛隊の頭と津波殿をお連れしました」

「……入れ」

重たげな不陰気の声が襖の向こうから聞こえた。

襖が開いた先にいた人物
座っていた。

火の国の守護大名、桜華松証が

「苦しゅうない、ちこう寄りたまえ」

桜華の正面に伊瀬が正座をして座る。その表情はどこか緊張していた。

「御主が自衛隊とか名乗る軍隊の頭じゃな？」

「はい、陸上自衛隊・東方面隊第2旅団司令部第31普通科混成中隊の中隊長の伊瀬勇太と申します」

「御主、ワシに何をして欲しい？」

暫らく沈黙しながらも伊瀬は桜華の問いに答えた。

「我々は別の世界より参った者たちです。しかしながら、元の時代に戻る事を捨てこの世界で生きる事を決断し、是非桜華様の元で働きたい次第に参りました」

伊瀬は深々と頭を下げる。すると桜華は突然大きな拍手をする。

「実に愉快じゃ、その申し出快く引き受けた。早速そちらの力を試すので、明日この紅蓮城から西の戦で我が軍が苦戦しておる。そこに我が方の増援とともに参戦して欲しい」

「ははっ、殿のご命令と有れば」

この戦いで自衛隊の実力が評価されるのは見ての通りだ。

忍風自衛隊

式の巻：火の覚悟（後書き）

次回、自衛隊の戦力に他国が震撼する

参の巻：自衛隊の戦力（前書き）

いざ、戦地へ出陣

忍風自衛隊

参の巻：自衛隊の戦力

補給地に引き返した伊瀬たちは、明日行なわれる戦のための作戦会議を開いていた。

「敵の軍勢は土の国大名・岩永ゲンカイの歩兵2000、騎馬1000、鉄砲200、忍者10人といった大規模な戦となる。我々は74式戦車と装甲車1、ジープ2、多用途ヘリの編成でいく、勿論木ノ葉の忍もこの任務の参加を同意している」

「我が方は中央から桜庭小隊と火の国の一個中隊規模の戦力、左から訓練生のヘリとジープ2と鉄砲隊で攻め入って、右の方からは森本小隊の装甲車と騎馬軍が進軍する」

作戦内容としてはベタな方法であるが、問題は敵の作戦である。

桜華軍の軍師に聞いたところ、土の国の騎馬対は少数ではあるがかなりの精鋭揃いで『無敵騎馬軍』の名に相応しいほどの戦果を上げている。

火の国は大陸や諸外国からの輸入によって土の国以上の鉄砲隊を保有するが、鉄砲は弾の装填から発射までが時間が掛かるため攻撃力の割には実戦で不向きな面が残っていた。

「だから進軍する鉄砲隊にはジープとヘリで発射までの援護を行なうて欲しい。それぐらいの時間なら少ない戦力でも十分な攻撃ができる」

翌日の早朝、朝早くから陣地の準備を進めいつでも戦えるように備えた。

合流した現存している戦力は昨日聞いた戦力の半分ほどしか残されていなかった。

先日の戦の最中、敵の騎馬隊の合流が間に合っただけのまま形勢を押し返されていたのが現状であった。

「岩隠れの忍はもう直ぐ木ノ葉の忍が一斉に掃討するらしい。俺た

ちは自分の仕事だけをすればいいんだ、全員乗車ッ！」

伊瀬の合図と共に各車両に隊員たちが乗り込み、伊勢は本陣から無線で指揮を取る事となった。

「現時刻を持って作戦を開始する。各々の部隊は各隊長の指示に従って行動するように」

中央部隊

「こちら74式、魚が寄ってきましたどうぞ」

『こちら本陣、有効射程内に入り次第砲撃を開始せよ』

「了解」

砲身を水平にして敵に向ける。

「撃ち方始め！」

機長の楠田道治陸曹長が叫ぶ。

74式戦車の105mm砲が敵の足軽隊を襲った。

慌てて突撃をしてくるが、火の国側の足軽も前に出て攻撃を開始する。

戦車は前進しつつ、砲撃主の畠山が展望窓を開け、上部に装着されている12.7mm重機関銃を放ちながら敵を蹴散らしていく。

その横から他の桜庭小隊の隊員も前進して行く。

89式小銃で味方を援護しつつ、敵を押し戻すように進んでいく。

右舷部隊

「放てッ！」

威勢のいい声と共に鉄砲の銃声が鳴り響く。桜華軍の鉄砲隊の第一射が敵の身体を貫く。

「次が来るまでまだ時間がある、このまま一気にしかけよ！」

敵軍が攻めてこようとしますが、藤堂が指揮する訓練生の乗ったジープ（73式小型トラック）が前に出て、搭載されている機関銃MINIMIを敵に放ち時間を稼ぐ。

回りこもつとする足軽たちには多用途ヘリから成田が89式小銃を放つ。

「こちら成田、十分時間は稼げたぞ！」

連絡を聞きつけた鉄砲隊がジープの影などから敵に向つて火縄銃を放ち、その場にいた部隊を一掃する。

「このまま突っ込んでくぞッ！」

景気づけと言わんばかりに後退して行く部隊に手榴弾を投げ込む。爆風で足軽が5人ほど吹き飛ぶ。

左舷部隊

「桜庭小隊と訓練生たちは順調に作戦を遂行して行きます」

「よし、俺たちも出撃開始だ。騎馬隊に合図送れ！」
ブオオオオッ！

自衛隊に手渡されていた法螺貝の音で一斉に騎馬隊が林から出てきて進軍を開始した。

96式装輪装甲車の12・7mm重機関銃で敵を次々と駆逐していく。

歩兵で89式小銃を放つ森本小隊の隊員もゆっくり前進しながら敵の陣地へと侵入していく。

土の国・岩永軍陣地

「報告いたします、桜華軍の兵力の中に妙な鉄砲を持つ兵士と鉄の箱、鉄の鳥を確認しました！」

「我が騎馬隊は鉄の箱の砲撃により半分以上の戦力を失い、足軽たちも大砲のない鉄の箱に追い掛け回され壊滅いたしました」

「鉄の箱に鉄の鳥だと？・・・奇怪な、我が方の鉄砲隊はどうした！？火の国ほどではないがそれなりの数はいるはずじゃぞ！」

岩永軍の総大将である岩永ゲンカイは偵察兵に檄を飛ばす。昨日まで優勢だった戦況がここに来て一気に押し返された事に腹を立て

ているようだ。

「それが・・・鉄の荷車に乗っている輩の鉄砲で・・・」
すると周りの様子が騒がしい。空を見上げると鉄の鳥 多
用途ヘリが敵陣地の上空に到達していた。

「弓を持って！あの鳥を射抜くのじゃ！」
ゲンカイが急いで指示を出す。

しかし、いくら矢を放ち槍を投げようとも多用途ヘリはその攻撃の射程外にいるので攻撃を仕掛けても意味がなかった。

「敵の本陣上空に到達、これより掃射を開始する！」

89式小銃で敵の兵士を狙撃し、手榴弾を取り出し敵陣地のど真ん中に投げ込んだ。爆発した手榴弾に驚いた兵士たちは驚き戸惑う。
ドーンッ！

砲撃を放ってきた74式戦車の攻撃で岩永軍は完全に沈黙した。

「て、撤退じゃ！皆のもの、撤退じゃ！」

一斉に逃げ出していく岩永の軍勢にそれ以上の追撃はなかった。

「作戦成功！敵部隊は撤退したぞ！」

紅蓮城では桜華の耳に自衛隊の勝利の報告が届いていた。

「そうか、自衛隊たちを交えたわが軍が勝利したか」

「はっ、敵は戦車なる鉄の箱の大砲で蹴散らされ、鉄の鳥からは人が乗って鉄砲で敵を蹴散らしたそうです」

桜華は満足の笑みを浮かべて伝令に手紙を出す。

「これを伊瀬殿に渡せ、今日は久々の宴会じゃ！」

戦闘を終えて補給のために帰還した伊瀬達のもとに桜華からの手紙が届いた。

伊瀬が手紙を広げて中身を読み上げる。

「先の戦ご苦労であった。今宵宴の席を設けるため兵を連れて紅蓮城に来られたし 火の国守護大名 桜華松柱」

「皆！桜華殿から宴の誘いが来たぞ！」

「「「おお！」」」

「しかし全員で押しかけると補給地が手薄になるな……」
すると今度は津波たちが補給地に押しかけてきた。

「伊瀬、先の戦は見事な活躍であつたぞ」

「それ程の事でもないさ」

「大名に呼ばれてるのだろう？俺たちがこの砦を守るからお前らは
行ってもいいぞ」

「すまないな」

伊瀬が申し訳なさそうに言う。彼等も裏で岩隠れの忍と命をかけた
戦いを繰り広げていた事は彼も知っている。

「気にする事もあるまい。いまや俺とお前は一蓮托生の友だ、俺た
ちは仕事分の報酬さえもらえればそれで十分だ」

「帰ってきたら一緒に飲みなおすか、初仕事の成功祝いを」

「だな！」

いつの間にか2人の間には固い友情が結ばれていた。

生まれた世界・環境は違えど、男同士の友情とはどこの世界でも
変わらないものであつた。

土の国・大和城

「何と！あの名将とも言われた岩永が……たかが火の国の軍勢に
負けただと！？」

「はっ！それがどうも、火の国の桜華が鉄の生き物を操る者達を引
き込んで増援によこしたと……」

土の国の守護大名である天崖康則はこの事実を知り、翌日に岩隠
れの里へと自ら足を運んだ。

「土影様、天崖殿が御着きになられました」

「客間に通せ」

岩隠れの中忍に案内され天崖は客間の椅子に腰をおろした。

「康則殿ほどの御方が護衛もなしに来られるなど・・・何か訳ありのよう件で？」

「実は先日の戦で我が国の名将である岩永家が火の国の桜華に敗れた」

「はっはっはっは！ご冗談を、いくら数で勝る桜華でも無敵騎馬軍を揃える岩永殿が戦に負けるはずが・・・」

土影は真っ青な顔になっていて天崖の顔を見てそれ以上言葉を放つことは無かった。

「そこで御主達岩隠れの忍に頼みたい、奴等がどのような戦力を持ち合わせているのかを調査したい」

「隠密任務であるのなら、我々の得意分野であります。我が忍里独特の忍術である影分身を使えばそのような偵察はたやすい事です」
こうして土影は天崖の依頼を受けることにした。

自衛隊の補給地のある木ノ葉隠れの里では、現在自衛隊と木ノ葉の忍達で里を囲むためのバリケードの準備をしていた。

「このぐらいでいいぞ！」
手斧を持った自衛官が合図を送る。

林の中から木ノ葉の忍がそろそろと出てきてその場を離れる。

「こちら夏井三曹、こっちの伐採は終了しました。そっちはどうですか？」

「こちら石田二士だ」

「現在9割方の伐採は終了した。後は木を退かせれば準備は整った了解！」

通信を終えてバリケードの内側になる場所に入る。

「火遁・火炎弾の術」

忍たちが火遁の術で木の後処理をしながら合図を里の中央に送る。

「・・・見えた、木が燃えている煙だ。津波、やってもいいぞ！」
双眼鏡で周りの様子を監視している伊瀬が叫ぶ。

「木遁秘術・国防木門！」

巨大な木の門が里周辺を包み込んで完全に門からしか入れないようにする。

「いつ見てもすごいな、お前の木遁忍術は」

「これもマダラの万華鏡写輪眼と同じ血継限界みたいなものだからな」

血継限界、ある一族のみに代々受け継がれていく術の中でも最強の名を不動のものとし、忍の術を開祖させた六道仙人の持つ三大瞳術の一つである『輪廻眼』もまた血継限界に数えられている。

木ノ葉隠れの里で血継限界の称号を持つのは日向の白眼、うちの写輪眼、そして忍頭である津波の木遁忍術がそれである。

「さてと、時間も昼だし飯でも取るか」

「冷蔵庫にまだカレーがあったはずだから温め直して食うか」

2人は屋上から1階にあるリビングへと向う。この家は津波が里を興す際に最初に建てた詰所を兼任した津波の自宅である。

後にこの家が『火影の館』と呼ばれるの時が来るのはそう遠くも無いだろう。

「それにしてもこの里は土地条件がいいな。近くには貯水池や天然温泉に天然ガス、更にお前らの実戦演習のできるほどのスペースもある上に一般人が住める居住区もある」

「里を興すというのはそういった条件が揃ってこそできるんだ。皿を出せ」

伊瀬が戸棚から皿を取り出すと、玄関の方から扉を叩くが聞こえた。

「誰か来たぞ」

「盛り付け頼む」

コンロの火を止めて玄関の方に向かう。

「御頭様！」

「イツキ、どうしたんだそんなに慌てて」

木ノ葉の若手中忍のイツキが息を切らしながら玄関に立っていた。

「い、岩隠れの忍がこの里に潜入しました」

「な、何だと!？」

「里を巡回している際に負傷した我が方の忍を発見して事が発覚しました。敵はどこにいるか検討もつきません」

津波の顔がいつもより険しくなる。するとリビングの方から伊瀬が出てくる。

「津波、どうかしたのか？」

「伊瀬・・・直ぐにお前の部下たちの戦闘の用意をさせろ。この里に侵入者が紛れ込んだ、全力を挙げてこれを殲滅するぞ！」

「判った!直ぐ補給地の方に向かう」

家の側に停めていた偵察用のバイクに乗って補給地へと急ぐ。

忍風自衛隊

参の巻：自衛隊の戦力（後書き）

木ノ葉と自衛隊の運命は！？

忍風自衛隊

四の巻：開花する力（前書き）

侵入者はいずこへ？

四の巻：開花する力

その日の午後からの木ノ葉は騒然としていた。

自衛隊と木ノ葉の忍による岩隠れの忍の山狩りが行なわれ敵を炙り出そうとするが、まだ里の内情を完全に把握できてない自衛隊と木ノ葉にとっては間が悪かった。

『こちら地上第3班、目標発見ならず』

『こちら空中班、それらしい人物発見できません！』

通信室に色々な情報が飛びかい、現場は混乱していた。

「各車両部隊に告ぐ、これより非常事態宣言として本部に戻る際のコードを発動する。コードは自分の所属と小隊長または機長の名前とする」

補給地の外から1人の自衛官が歩いてこっちに向ってくる。

しかし妙な事に武器らしいものは装備しておらず、ただ補給地に向って歩いてくる。

「止まれ！」

入り口の警備をしていた隊員に止められる。

「お前の所属と隊長名は？」

「自分は森本小隊で森本二尉が小隊長です」

「・・・入れ」

ちゃんとコードを言ったのでそのものを通す。

(馬鹿な者たちめ、この男に自白剤を飲ませて暗号を吐かせればこれぐらい容易い事よ)

何と今先ほど門を通った男は岩隠れの忍であった。おそらく変化の術で姿を変えているのだろう。

「まで！」

男が呼び止められる。後ろから伊瀬が津波と一緒に男によって来る。

「な、何でしょうか？」

「お前森本小隊の隊員だそうだな。森本の奴が呼んでいるから小隊の戦車の方に行け」

「はい、判りました」

男がその場を去ると、伊勢と津波はにやりと笑い小型の通信機を使う。

「餌に喰い付いた。捕まえろ」

男は戦車を停めてある倉庫に着く。

(これが岩永様を蹴散らした鉄の箱・・・任務はあくまで偵察だが破壊しても良からう)

男が懐から起爆札を出そうとしたそのときだ。

ザッ、バツ！

周囲に隠れていた自衛官が89式小銃を構えて男を取り囲んだ。

「お、おい何の冗談だよ!？」

「とぼけても無駄だ、岩隠れの忍者さん」

「・・・ちい！」

男は変化を解いてもとの姿に戻った。

「どうして俺の正体がばれた？」

「森本小隊に戦車は無いんでな、伊瀬中隊長が隊員が戻ってくるたびに色々と鎌をかけていたんだが・・・見事に引っかかってくれたぜ」

大腿に装着しているホルダーから武器を出そうとするが。

バンッ！

武器の入ったホルダーを撃ち落とされる。

「さてと、お前はここに何をしに来た？何の目的で俺たちの基地の内部を探ろうとしていた？」

「フ・・・忍がそう簡単に情報を敵に漏らしはしない。加えて・・・常に相手の裏を読むべし！」

すると男の姿が煙となって消えた。

「分身の術!?」

「いや、実態はあったんだ……あれは影分身の術だ」

「今のが影分身だとすれば……本体のほうにここの情報が……」

（危なかったぜ。用心をして影分身に偵察をさせたのは正解だったな）

影分身の術は分身の術と違って分身が消えると、分身が得た情報はそのまま本体の得た情報として残る。

しかしチャクラを分散させて実体を作るゆえに後に木ノ葉隠れではこれの発展系である『多重影分身の術』は禁術として初代火影が封印した（影分身程度であれば上忍は使用可能）。

（有力な情報は得られなかったが、敵の戦力は大体は判明した。後はこの里を出るだけ……）

「いたぞ！」

気配に気付いたのか木ノ葉の中忍たちが一斉に岩忍のいる林に向かってクナイを放つ。

グサツ！グサツ！

クナイは岩忍に命中したかに見えた。

倒れてきたのは木の丸太であった。

「変わり身の術か」

「敵は岩隠れの手慣れのようだな。津波様、逃げられました」

『門の警備を固める。偵察をしに侵入するなら近くに仲間を配置しているはずだ』

中忍たちは急いで門のほうに向う。

門の方では成田と石田がジープに乗って辺りの搜索を行なう。

「こちら石田、敵らしき輩は見当たらない」

『警戒続行、やむ得ない時は撃つても構わん』

「了解！」

しかし敵は直ぐに姿を現した。

ジープが来たとも知らずに林から出てチャクラを足に練って壁を登っていた。

「撃ち落せ！」

運転席から石田が89式小銃を、後部座席から成田がジープ搭載の機関銃MINIMIを男に放つ。

下から放たれる弾を男はもろに受けるが、煙となって消える。

「影分身か・・・コイツは色々と厄介だぜ」

「こちら石田、敵を発見したが影分身だった。そっちの方はどうだ？」

『こつちもやったにはやったが影分身だった・・・まさかとは思うが、相手は分身しか送り込んでいないんじゃないか？』

岩忍は補給地の中を自衛官に変化して散策していた。

（外の分身たちは上手く攪乱しているようだ。そう、俺はあの時からこれが畏だと予想していた！）

あの時とは伊瀬に話しかけられたときだ。

あの時点でこれが畏だと踏んでいた岩忍は誰にも感づかれないように影分身を放ち、里にいる忍や自衛官を攪乱させてその隙に補給地内部の調査を行っていた。

（さて、問題は敵の戦力だ。これまで影分身の得た情報に寄れば大砲のついた鉄の箱が3、大砲無しが2、鉄の大荷車が5、荷車が6、鉄の鳥が3、その他にもいろいろあったが・・・このぐらいで情報は十分だろう）

岩忍は外に出て武器が保管されている倉庫に向う。

（本任務はあくまで偵察。しかし、土影様からの命により敵の鉄砲弾を1発残らず焼き払えとのことだ。この作戦が上手くいけば我が土の国が優位に立つ）

倉庫の扉を開けると、中は暗く一見誰もいる様子は無い。

「これで俺の任務も終わりだ」

起爆札を投げようとしたそのときだ。
バンッ！

突然鳴り響く銃声、岩忍は心臓を撃ち抜かれた。

「な、何故……」

「俺がこの倉庫の番を任されているからだ」

9mm拳銃を持った鷹波が倉庫の奥から出てくる。

「ここには自衛隊の鉄砲の弾の他に俺たちの武器も保管しているんでな、番は2人でやるのが常識だが……俺なら1人で4人分の戦力になる」

岩忍が煙となって消えない、どうやら本物らしい。

鷹波が通信機を繋げて「倉庫に侵入してきたネズミを始末した」と通信部に連絡する。

岩忍の死体は木ノ葉の医療班が回収して解剖などを行なったらしい。

「土影様、どうやら偵察は失敗に終わった模様です」

「いや、失敗でもないぞ。アイツは念には念を入れて里に影分身を3人残した。木ノ葉で影分身が潰されるたびに里に残った分身が敵戦力の分析を行い、情報は我等の手に残った」

土影が見せたのは、自衛隊の戦力を書き記した巻物であった。

「これを天崖様の元に届けよ。それと同盟を結んでいる雲隠れの里にも伝令を送れ、木ノ葉隠れの忍の力は侮れん、完全に芽吹く前に潰した方が得策だ」

「はっ！」

瞬身の術で部下が消えると同時に土影はこう呟いた。

「木ノ葉隠れは明日潰れる」

あの侵入者騒動から1日が過ぎ、木ノ葉に安息が訪れたと思いき

や……再び暗雲にさらされる予感となった。

「あそこが木ノ葉隠れの里だ」

林の向こうから複数の男たちが木ノ葉隠れの防壁を見る。

数にして20人、忍にしては一個中隊クラスの戦力がそこに集結していたのだ。月の明かりに照らされて見える額当てには雲の絵と岩の絵が彫られている。

「夜襲を仕掛ける。起爆札用意！」

門に起爆札を貼り付けて門を爆破する。

「突撃ッ！」

岩忍と雲忍の軍勢が里に侵入する。門を警備していた木ノ葉の中忍たちは突然の奇襲になす術もなく殺された。

「1班は木ノ葉の頭を、2班は自衛隊を殺れ」

2手に分かれてそれぞれに攻撃を仕掛けに行く。

しかし彼等は自衛隊の設置していたセンサーにまったく気付いていなかった。

ブーッ！

『敵襲ッ！敵襲ッ！』

センサーの反応をキャッチした自衛隊は大急ぎで基地防衛の準備を始めていた。

「装甲車を出せ！90式は里を走行しつつ敵を発見したら攻撃を仕掛ける！」

「こちら、自衛隊補給地！木ノ葉本丸聞こえるか？」

『こちら木ノ葉本丸、偵察部隊に確認させたところ門の見張り2人が死亡、現在上忍・中忍を中心とした4人班で敵を搜索中！』

本丸（火影の館）を中心とした2つの木ノ葉の拠点で連絡を取り合い、何とか敵を迎撃しようとする。

『こちら木ノ葉第2班、敵3人を捕捉。額当ては……岩隠れと雲隠れ、これより殲滅に入る……ブチッ！』

「補給地より本丸へ、木ノ葉第2班が戦闘を開始、増援を求む」

一方捜索に出ている自衛隊のジープは暗い夜道を明かりで照らしながら敵を探そうとする。

「こちら成田、敵意まだ発見できず。てかこんな暗いんじゃ判りません！」

『暗いときにやしないと夜襲の意味が無いだろう。こっちも異常なし、では定時連絡を忘れずに』

通信が切られて成田は搭載されている機関銃MINIMIをしっかり握る。

(どこにいやがる・・・?)

目を綴じてひたすら感覚を磨ぎ澄ます。

ガサツ・・・!!

「・・・ツ！止まれ、木の上だ！」

成田が機関銃MINIMIを放つと、木の上から雲隠れの忍の死体が降ってきた。

「まだ何人かいるぞ！」

運転席の石田も89式小銃を手に取り木の上に向かって放つ。

(どうなっていていやがるんだ！？奴等忍でもないのに何て聴力だ・・・ほんの少し木が揺れた音だけで判断しやがる！)

木の上に隠れている岩隠れの忍が攻撃から逃れるために木の影に息を潜める。

「そこか！」

成田が右の木に向かって手榴弾を投げつける。爆発で木が倒れ隠れていた忍が宙を舞う。

「いけーッ！」

成田と石田が一齐に89式小銃と機関銃MINIMIを掃射させて忍を撃つ。

放たれた凶弾は忍の身体を貫く。他の忍はその場から立ち去る。

「やたぞ！」

「こちら成田、敵2人を撃破。直ぐそちらに戻る！」

ジープは補給地へと引き返していく。

ドーンッ！

90式戦車搭載の120mm砲の砲撃が辺りの地面を吹き飛ばす。「ば、馬鹿な！大砲を積んだ鉄の箱は止まってでないと大砲を放てないのに・・・」

先の戦で活躍した74式戦車。1974年に自衛隊に正式採用されて以来、2000年に退役した61式戦車と共に戦場を駆けてきた。

しかし現在忍が戦っている90式戦車は第3世代戦車の中でも高水準の射撃能力と運動性を兼ね備え、夜間の射撃も昼間とさして変わらず走行しながらの射撃も可能となった。

現在74式戦車はその姿を消しつつある中、自衛隊の主力車両となっている。

「敵は残り5人、我々の攻撃にびびって逃げています」

90式戦車操縦士の滝口陽太二等陸曹が赤外線カメラで外の様子を覗く。

「こちら90式機長の山梨准尉だ。敵は我々の攻撃に恐れをなして後退している、叩くなら今がチャンスだぞ」

天窓を開けて砲手の日向護三等陸曹が重機関銃で援護しつつ敵を撃破していく。

「敵殲滅を確認、本丸に連絡を！」

『こちら本丸、敵残存兵7名が自衛隊補給地に進攻中。補給地に直ぐ向われたし、我等も直ぐ向う』

「了解。滝口！補給地に進路あわせ！」

「了解！」

90式戦車が補給地に向って道を進む。

敵がこっちに向ってきている事を聞きつけて基地の正面に203mm自走榴弾砲を配備する。

『こちら武田一士、照準と弾の装填が完了しました』

「よし、敵が見え次第威嚇で1発だけ放て」

『了解！』

まだ正式に配属されたわけでもないのに実戦の砲手を任された武田にとってこれは一世一代の大仕事だ。

「目標捕捉、発射します！」

203mm榴弾砲が今放たれた。

爆風が辺りの砂を飛ばし、その中から敵の忍が疾風迅雷の速さで近付いてくる。

「撃てーッ！」

五十嵐の指示で87式偵察警戒車が25mm機関砲の弾を撃ち散らす。

敵2人を撃破したが、生き残った5人が接近してくる。

「火遁・火炎大車輪！」

炎の天津波が基地ごと自衛隊を襲おうとする。

「水遁・大瀑布の術！」

87式偵察警戒車の上で鷹波が印を結んで水無しの水遁の術で火を掻き消す。

「土遁・土龍弾！」

「水遁・水龍弾の術！」

土の龍と水の龍が互いに衝突しあうが、五遁の優劣関係では水遁は土遁に弱く、土龍によって飲み込まれた。

「雷遁・雷龍閃！」

土遁に弱い雷遁の術を放って土龍を消し去る。

「術では埒があかない、白兵戦を仕掛けるぞ！」

クナイを持った忍が襲い掛かる。

「このッ！」

襲い掛かってくる忍の攻撃を成田は89式小銃を振り回しながら

応戦する。

「死ね小僧！」

横から別の忍が手裏剣を放っていることに気付くと、成田は上に向ってジャンプした。

バツ！

成田は高く、更に高くジャンプしていた。

自分でも信じられなかった、自分は今補給基地の屋根ぐらいの高さまでに跳んでいることに。

(俺……いったいどうしちゃったんだ?)

現状を理解できず、ひたすら落下しながら敵に89式小銃の銃弾を浴びせる。

「て……撤退だ！撤退するぞ！」

退却する敵は木ノ葉の忍に任せ、自衛官たちは成田の方に向って走った。

「成田……お前さっきのジャンプどうやって……」

「お、俺にもわからないんだ。思いつきり力を入れてジャンプしたらなんかこう……」

「……お前もしかして、無意識のうちにチャクラを足に溜めてその力でジャンプをしたんじゃないか？」

鷹波が恐るべき仮説をたてた。

「それじゃ俺……」

「十分忍になれる才能があるということだ」

もはやこのことには驚くしかなかった。

成田はその場で気絶してしまう。

「お、おい！」

「心配するな、チャクラを初めて開放したんで体力も精神力もへとへとなっているだけだ。こいつを寝床に運んでくれ！」

直ぐに駆けつけてきた隊員たちが成田の肩を背負って補給地へと運ぶ。

土影は生き残った忍からの任務失敗の凶報を聞いて怒り返っていた。

「なんとという醜態だ！我が岩隠れの里がたかが設立数ヶ月程度の忍里に中忍・上忍を4人も失っただと？・・・堪忍袋の緒が切れた、般若！」

天井に控えていた岩隠れの暗部（暗殺戦術特殊部隊）が降りてくる。

「何事でありましょうか土影様？」

「天崖様に報告せよ、火の国の軍事力は並々ならぬほどに増強したと」

「はっ！」

瞬身の術で早速方向へ向う。

「今に見ておれ・・・火の国・・・木ノ葉隠れ・・・そして自衛隊・・・！」

土影の瞳に怒りの炎が赤々と燃え上がった。

四の巻：開花する力（後書き）

怒りの炎を燃やす土影
果たして火の国の運命は？

忍風自衛隊

伍の巻：いまだかつてない大合戦（前書き）

あれから1週間

伍の巻：いまだかつてない大合戦

木ノ葉隠れ夜襲事件から1週間後、火の国の守護大名である桜華の元に災いを呼び起こす手紙が届いていた。

「おのれ天崖めツ！自国と同盟国の忍が殺されたくらいでその賠償を払えだど？それもその代償が火の国の軍事貿易を行なっている葛西だと・・・片腹痛いわッ！」

怒り狂った桜華はその場で手紙を破り捨てる。

「しかし桜華様、このまま行けば土の国と雷の国の同盟軍が我が火の国に攻め込んできますぞ」

「策は既に討つてある・・・自衛隊の力をまた借りるぞ。今度は国内の諸大名も集結させる！」

「はっ！」

セイゾウとハルノブが玉座の間から出て行き戦の用意をする。

「火の国が攻め込まれるだど!？」

直接自衛隊に出撃要請をかけたに来ていたセイゾウが事のしだいを伊瀬に話す。

「卑劣な・・・敵の軍勢はどれほどのものだ？」

「土の国の御上天崖殿と雷の国の御上叢殿が動くとなれば・・・
・総勢10万を超える軍勢が押し寄せてくると考えていいだろう」

「それだけでは有りませんよ。向こうの忍里の忍も絶対に戦闘に参加させてきますよ!」

伊瀬は黙りながら作戦を練る。

「・・・・・・・・・・・・・・・・戦うしかないな。全車両・装備の点検を急がせろ！我々の全戦力を持って火の国を援護する！」

この英断により歴史の針が動き出した。

「装甲車の点検完了しました！」

「74式、90式、いつでも出撃できます！」

「ご苦労。弾薬の準備もしておけ、大型トラックを補給地として設置して引き返さなくても済むようにしろ！」

他の隊員たちもマガジンに弾を詰めたり、トラックに物資を積んだりとせっせと戦の準備を整えていく。

「伊瀬！」

津波が伊瀬を呼ぶ。

「敵の忍の戦力がわかったぞ。敵の忍は本陣警護型が10人、前線攻撃部隊が2中隊、偵察が2小隊と言ったところだ」

「岩と雲もずいぶんな部隊を送り込んできたな。こいつらのほうはお前たちに任せる、仮に出くわしたとしても俺たちの武器で蹴散らしてやるさ」

伊瀬は地図を見ながら部隊の配置を考える。

「ところでセイゾウの部隊はどこに侵攻しているんだ？」

「今はこの国境線に位置する邦船城に攻めていって占拠して防衛線を張るらしい」

「いい手だ。ではこの邦船城の陣地に装甲車と偵察警戒車だな」

模型を置きながら敵の動きについて予想を立てつつ部隊を配置してみる。

3日後、敵が邦船城の直ぐ側の平地で陣地を構えた。その数は当初の予測を超え、総勢15万の大軍勢であった。

「中隊長、陣地内に全てのトラックの配置が完了しました」

「危険な任務なのに、ご苦労であった。皆の衆！我々はこの戦で命を落とすやも知れないが、我々は必ず生き残って木ノ葉隠れの里に戻る事を願い・・・この戦で勝利を収めるぞ！」

「オオオオオオオッ！」「」

隊員たちが89式小銃や火の国から支給された刀や槍を掲げて士気を高める。

ポオオオオオオ!

法螺笛の音が鳴り響き、戦が始まった。

矢の雨や銃弾の嵐の中を掻き分けてくる足軽たちがぶつかりながらも戦いは幕を開けたのだ。

「セイゾウ殿の部隊が優勢、ハルノブ殿の部隊は少々苦戦を強いられていますがこの様子でなら突破は可能です」

何人もの隊員が双眼鏡で戦況を覗き出し出撃の機会を覗く。

『こちら左翼桜庭小队、萩の月の須々木義武が敵の軍勢を突破した模様だ』

「よし……全部隊に次ぐ、出撃開始！」

戦車が道を走り、2機のへりが空を舞う。

突如林の中から現れた74式戦車に敵の足軽たちが戸惑う。

「な、何だあれは!?!」

「怯むな!突撃イイイ!!!」

突っ込んでくる兵士たちに向かって105mm砲が火を噴く。

「初弾命中、次弾発射!」

2発目の砲撃で道が開け、74式戦車が前進していく。

「畠山、機銃で接近してくる敵を薙ぎ払え!俺も搭載機銃で迎撃する」

「了解!」

畠山が天窓を開けて上部に搭載されている重機関銃と機長の楠田が74式戦車搭載機関銃で敵を掃討する。

上空を悠々と翔けるUH-1J多用途ヘリは敵軍と交戦しているセイゾウの部隊を発見する。

「こちら三国、畷島さんの部隊が苦戦中」

『援護しろ、セイゾウ殿の部隊は貴重な戦力だ』

「了解。成田、やっちゃってもいいわよ！」

後部のドアを全開にして、200発入りのマガジンをセットした機関銃MINIMIを地上の敵に向かって放ち始める。

「そらそら！小雪、もっとへりの高度を下げる！」

「判った。でも敵の弓とかには気をつけて」

ゆっくりと降下していき、狙いを確実に機銃掃射していく。

「上げる！手榴弾で辺りの敵を一掃する！」

機関銃MINIMIを床において箱に入っている手榴弾を敵軍に向かって投げる。

「このまま前進するわよ！」

「OK、左舷に教官たちのジープを確認！」

藤堂が指揮するジープが場そのので停止して藤堂が降りる隊員を援護するために、搭載されている機関銃MINIMIを放つ。

「お前ら、ジープから離れるな！」

ジープから降りた石田を始めとする訓練生も89式小銃を構えて敵軍に撃ち込む。

後方から90式戦車が登場し、120mm砲を放ちながら前進していく。

「突っ込め！」

「はいッ！」

藤堂が機関銃MINIMIを放ちつつ、隊員の足に合わせてジープが進んでいく。

小走りでジープから降りた隊員も進んでいく。

バイクで鍋島と後藤が敵軍に突っ込んでいく。

「後藤、奴等をこっちに引き寄せろんだ！」

「判ってる！」

敵を誘導しつつ、自分たちの有利なところへ誘い込む。

何も知らない敵兵は誘われるがままに足元が見えない草むらに誘

い込まれる。

「火を放て！」

草むらに隠れていた火の国の足軽が松明を地面につけると、油でも布いてあったのか、草むらが円を描くように燃え盛り始める。

「退けッ、焼き殺されるぞ！」

火を潜り逃げ延びるものもいれば、全身火達磨になって倒れるものも現れる。

『こちら桜庭装甲車両小隊、現在の包囲網を突破。航空機の援護を求めろ』

「コブラ聞こえるか？すぐさま桜庭小隊の援護に向かえ、場所はE-78ポイントだ」

伊勢が無線を切ると、89式小銃を持って軽装甲車に乗る。

「中隊長、とうとう我々も前に出るんですね」

運転席で既に準備を完了している五十嵐が後部座席の伊瀬に話しかける。

「この戦いは俺たちも前線に出ないと勝てん・・・装甲車と警戒車を残し全機出撃開始だ！」

邦船城の門が開き、対地対空誘導弾を搭載した高機動車、伊瀬を乗せた軽装甲機動車、自走榴弾砲、人員を乗せたCH-47Jが出撃した。

AH-1S、通称『コブラ』に搭載されている20mm機関砲が敵を追撃していく。

「武藤さん、あいつらゴキブリのように逃げていますよ」

前座席のコックピットで機銃の操作を行なっている椎名曹長が操縦をしている武藤三尉に話しかける。

「敵軍勢を確認、対戦車ミサイル撃ち込んでみる」

言われるままに操作して敵勢にミサイルを発射する。空からでは

爆煙で下の様子はよく見えないが、そうそうたる被害であろう。

「今度は敵の本陣に一発ぶち込んで見ますか？」

「その前に桜庭小隊の援護でもう1発お見舞いしておけ。その後弾の補給をしたら一気にやるぞ」

70mmロケット弾を敵の増援部隊に打ち込み、補給のために大型トラックが停車している樹林地帯に着陸する。

「ロケット弾だけでいいぞ！機銃の弾はまだ余裕がある」

「判りました」

トラックの中に椎名がロケット弾の弾を取りに行っているその時であった。

ガサガサ・・・

近くの林から岩隠れの忍者数名が出てきてコブラに近付いてくる。

「ハッ・・・椎名！戻ってくるんじゃない！」

武藤がホルダーから9mm拳銃を取り出して岩忍を撃つが当たらない。

岩忍達はコブラに何かを貼り付ける。起爆札だ。

「や、やめろーッ！」

ちょうど椎名がロケット弾を抱えて出てきたときであった。

バーンッ！

起爆札の爆発でコブラが吹き飛ばされた。辺りにコブラの残骸が散らばる。

「む、武藤さん・・・」

慌てて椎名は自分のホルダーから9mm拳銃を出して構える。

「で、出て来い！・・・武藤さんをよくも！」

しかしトラックから降りた瞬間、あっというまに岩忍に囲まれてしまう。

（やられる・・・！）

自分の死を覚悟したと悟って目を瞑る。

バツバツバツバツバツ・・・！！

銃声が連続して聞こえる。ゆっくり目を開くと、空から多用途へ

リが着陸態勢に入っていた。

「椎名曹長！」

成田が機関銃MINIMIで椎名の周りの岩忍を蹴散らし、着陸と同時にヘリから降りる。

「大丈夫ですか!？」

「俺は何とか、でも・・・武藤三尉が」

コブラの残骸が燃え盛り、成田は落ちていたヘルメットを手に取る。

「・・・萩本さん、このロケット弾まだ使えますよね？」

操縦士兼整備士の萩本忍二曹に問いかける。

「使えるっちゃ使えるが・・・どうする気だ？」

「コイツを敵の陣地に打ち込みましょう！」

萩本は目を大きく開いて高らかに笑い始める。

「はははは！お前ホント凄い事考える奴だな・・・無茶にも程がある！」

今度は恐い形相で成田をにらみつける。

「まず調整に時間もかかるし、何より手持ちの部品と工具じゃ・・・」

「なら信管剥き出しにしても打ち込みますよ！」

トラックに向かってロケット弾を手に取る。

「ま、まて！素人が下手にばらそうとするな！・・・判ったよ、ただし少し待っているよ、改造してUHからでも撃ち出せるようにしてやる」

多用途ヘリから工具を持ってきてロケット弾を入れる筒に色々な機器を取り付ける。

そんな事をしてしていると、向こうから藤堂と石田を含める訓練生を乗せたを乗せたジープがこっちに向かってくる。おそらく弾の補給に来たのだろう。

「どうなっているんだ!？」

ジープから降りてきた藤堂がコブラの残骸を見て驚き戸惑う。

「見ての通りですよ。敵は追っ払いましたけどこの戦力では敵本陣には……」

「よし、何とか撃てるように改造はしたぞ。ただし急増の突貫作業でやったやつだから撃てるかは試してみないとわからんな」

成田と萩本で多用途ヘリに改造したロケット砲を乗せ、トラックの中にあるロケット弾と弾薬の入った箱などを積み込む。

「残骸の荷物置き場は無事だったぞ。これも持っていけ」

荷台に収納しておいたであろう狙撃用の64式小銃を成田に渡す。

「よし行くぞ。小雪、ヘリを出せ」

「……」

しかし返事が返ってこない。

「どうしたんだ……小雪！」

ぐったりと操縦席にもたれかかっている小雪は顔が真っ青になっていた。

手袋を外して額に手を当ててみると、手に熱が伝わる。

「お前風邪ひいたのか!? 何で黙っていたんだよ」

「だって……無茶しないとこの戦い……」

「勝つとかそんな事言う前に自分の体調のこと考える横の馬鹿！」

小雪を無理矢理コックピットから降ろして大型トラックの助手席に放り込む。

「ここに隠れていれば暫らくは大丈夫だ。念のためにこの銃置いていくからな」

運転席のシートに自分の89式小銃を置いて多用途ヘリに戻る。

「椎名さん、アンタ確かヘリの操縦できたよな？」

「勿論だ、三国がああなっちまった以上俺がコイツで出る」

小雪が座っていたコックピットに椎名が乗り込む。

それと同時に成田と萩本も乗り込む。

「成田……気を付けるよ」

「教官も！」

ヘリが飛翔すると同時に左右の道から敵の足軽が攻めて来る。

「藤堂教官！」

「行け！この作戦を何としてでも成功させるんだ！」

再びジープの荷台に立ち機関銃MINIMIを放つ。他の隊員も89式小銃を放ちながら応戦する。

「教官！石田！」

多用途ヘリは真直ぐ敵の陣地へ飛んでいく。

「時間を稼ぐんだ！」

「ええい、これでもくらえ！」

石田が軍勢に向かって手榴弾を投げつけるが、爆発にも動じず敵は前進してくる。

「野郎！」

89式小銃を放ち続けるがついに弾が底をついた。小銃を捨て、腰に下げている刀を抜いて応戦する。

グサツ！

「ウツ・・・！」

「高野！」

「た、助けてくれ！」

バンツバンツバンツ！

「檜山！」

訓練生2人が一気に殺された。

バツバツバツバツバツ・・・カチカチ！

「この弾切れか！」

ジープに乗り込んでくる足軽の槍を奪って逆に突き返し、自分も刀を抜いて応戦する。

「教官、このままじゃ持ちませんよ！」

「石田、お前はトラックで逃げろ！」

ホルダーから9mm拳銃を抜いて敵を撃ちながら石田に指示を出す。

運転席に向かおうにも敵の数が多すぎてとてもではないが近づけない。

「でえいッ！三国！車を出して逃げる！」

両手に刀を構えて敵を切り裂いていく。

「構えッ！」

足軽たちが道を開けると、鉄砲隊が姿を現した。その銃口は石田に向いていた。

「離れる石田！」

トラックの側にいた石田を無理矢理突き飛ばし、放たれた銃弾を藤堂自らが受ける。

「藤堂教官！」

体中を撃ち抜かれ、その場に倒れる藤堂の側に石田は寄った。

藤堂の身体は既に冷たくなり、ただの肉塊と化していた。

「くそ………こんちくしょうッ!!！」

自分のホルダーから9mm拳銃を出し、藤堂の持っていた拳銃を掴みとつて鉄砲隊に撃ち込む。

「お前らが……お前らがッ!!！」

しかし拳銃の弾は直ぐに切れた。

絶体絶命のピンチとなった石田の前に奇跡は起こった。

ダッダッダッダッダッダッ!!！」

その場に装甲車が颯爽と現れ、重機関銃で敵を一掃する。

「石田君！」

救護陸曹の湊美由紀三曹が救急箱を片手に桜庭小隊の面々と共に現れた。

「怪我は？」

「ないけど………藤堂教官が……」

傍らに横たわる藤堂の死体を見て湊は思わず口を塞ぐ。

「装甲車に乗って。少なくともここよりは安全よ」

「トラックの中に三国の奴がいる。あいつ風邪引いて……」

「わかったわ。夏井君お願い」

トラックの助手席を開けた夏井邦男三曹は小雪を背負って装甲車の中に寝かせる。

「小隊長、機関銃の弾の補給と人員の回収完了しました」

「よし、74式聞こえるか？こちら桜庭小队」

「こ、こちら74式！敵に完全に包囲されました。105mm弾は・・・もう残っていません。応援を求む！」

敵の足軽と騎馬隊に囲まれた74式戦車は孤立していた。

全砲弾を撃ちつくし、重機関銃も搭載機関砲もすでに弾が底をついてまったく応戦ができない状態であった。

「楠田機長、このままではいずれやられてしまいます！」

「柿本、突破できないのか？」

怯えたような声でドライバーの柿本純一二曹に話しかける。

「燃料も残り僅か、大砲はすっからかん、機関銃も機銃も弾切れ・・・完全にお手上げ状態ですよ」

ここで戦車を1両失えば自衛隊の戦力は大幅に落ちるのは目に見えていた。

「・・・投降しますか？今までの戦いを見ていた敵の大名だつてコイツの性能は解っていますし・・・」

「馬鹿者ッ！今ここで外に出てみる、一瞬の内にこの中が天国に思えるぞ」

ダツダツダツダツダツ・・・！

外の様子が騒がしい。

柿本が操縦手展望窓から外の様子を覗いてみると、90式戦車回収車が敵を蹴散らしてきて、後方から203mm自走榴弾砲が援護射撃を仕掛ける。

「お前ら無事かッ!？」

「佐伯三尉の声だ！」

「こちら74式機長の楠田です。回収をお願いします」

「任せろ！」

回収車から降りた隊員がクレーンを74式戦車に取り付け、引き

上げを開始する。

「武田もう一発だ！」

「はいッ！」

ドーンッ！

ドライバーと機長を兼任している加持信幸三曹の命令でもう一発敵陣に榴弾砲をお見舞いする。

「引き上げるぞ！」

90式戦車回収車と共に自走榴弾砲も本陣へと後退していく。

伍の巻：いまだかつてない大合戦（後書き）

次回、この大合戦が終焉を迎える。

六の巻き：これぞ忍風自衛隊！

五十嵐が運転する軽装甲機動車が、中央を突破しようと奮闘している敵島のもとに辿り着いた。

軽装甲車の屋根が開き、顔を出した伊瀬が89式小銃で敵島軍勢を援護する。

「伊瀬殿！」

馬に跨って槍を構えている敵島が軽装甲機動車に近付く。

「援護感謝する！」

「敵島殿、このままこの戦線を突破するぞ！」

「御意！」

軽装甲機動車が再び走り出し、伊瀬は小銃を放ちながら前進していく。

囷になってバイクを走らせている後藤と鍋島は、途中で川辺でイカダの用意をしていた鷹波たちと合流した。

「バイクはここで乗り捨てるぞ！」

勇ましくイカダに乗り込んで出発する。

「鷹波、あれはちゃんと持ってきたのか？」

「この木箱の中に入っている、自分の目で確認してみろ」

後藤が箱の蓋を開けると、中には自衛隊が保有する84mm無反動砲『カール・グスタフ』と発煙弾と榴弾が数発入っていた。

「こんなちやちな筒が本当に戦車の大砲に引けを取らず大砲を凌ぐというのか？」

「こいつは1人でも持てる大砲だ。ただこの世界では赤外線誘導弾は使えないからな、下手をすれば自分たちが自滅するだけだ」

敵に覺られないように慎重にイカダを進めていく。

へりで移動を行なっている成田たちは敵陣地に見事侵入し、攻撃を再開する。

「おらおらおら！お前らに負けて溜まるか！」

もはや構うことなく機関銃MINIMIの弾を敵に撃ち込んでいく。これも執念なのか、それとも仲間の敵討ちか。

「そろそろ敵の本陣に到着するぞ！」

「空飛ぶ鉄の船がここに向かってきとるだど？」

天崖をはじめ、叢や他の名高い守護大名たちは恐れを感じてきた。

「こうなれば仕方あるまい、般若！」

雲隠れの暗部が姿を現す。

「例の兵器をここへ持ってこさせる。空を飛ぶ船など撃ち落してくれるわ！」

「はっ！」

兵士たちが引つ張ってきたものは、最近外国で主力兵器とされているガトリング砲、それも3つもだ。

ガトリング砲の砲門を上空のへりに向け。

「放てーッ！」

一斉射でへりを攻撃する。

「クソッ！あいつらあんなもんで・・・！」

コブラから持ってきた64式小銃で狙撃を試みるも、こう弾幕が厚くはうまく狙いが定められない。

「萩本さん！機関銃で援護を！」

「こんなに撃たれちゃこつちも危ねーぞ！」

カンカンとへりの底に弾が衝突する音が響き渡る。

「手榴弾ぶちかませ！」

素早く手榴弾のピンを外して下に投げようとするが。

バンッ！

ガトリング砲の後ろから狙撃してきた鉄砲隊に腕を撃ち抜かれた。

「グッ！」

手榴弾を落とさぬように慎重に逆手に持ち返る。

「この野郎！」

逆手で投げた手榴弾は、コントロールが備わっていないせいで出鱈目な所に放られた。

「大丈夫か成田？」

「掠り傷ですよ……でもこれじゃロケットは」

向こうからキュラキュラとキヤタピラの音がする。反対側のドアを開くと、90式戦車が敵陣地に突っ込んでくる。

「キュウマル特攻！」

砲撃をしながら戦車が柵を破って陣地内に侵入する。

「曲者じゃー！」

ガトリング砲を戦車に向けるが、その前に120mm砲で殲滅されて大名たちは驚き戸惑う。

「ひ、引け！撤退じゃ！」

各大名たちが馬に乗って逃げ出していく。

「逃がすかよ！」

すぐさま追い駆けていき、切り札であるコブラから徴収したロケット砲を発射態勢に移す。

「萩本さん！」

「発射！」

勢い良く70mmロケットが発射されるが、敵大名たちの正面に着弾して爆発した。突然の強力な火力の爆発を目にして、馬の足が止まる。

「外した、もう一発！」

しかしその必要は無かった。山の向こうから自衛隊のCH-47Jが飛んできて、着陸すると、火の国の足軽隊と自衛隊の歩兵戦力が突っ込んできて、大名勢を囲む。

「降伏しろ！お前たちは完全に囲まれているんだ！」

「何を抜かすか！我々にはまだ予備戦力として1万7000の兵士

「がいるのじゃ、お前らなど……」

すると先頭に立っていた武者が大きな声で笑い出す。

「はっはっはっはっは！残念だったな、そうくると思って移動経路であった橋は我々の工作員が破壊した！」

イカダで川を下っていた後藤達は、目的地である大きな石橋の下に到着する。

「セット完了しました。後は偵察部隊がもどってくればいつでもやれますよ」

「よし、このまま一気にケリをつけるぞ」

カール・グスタフを構えた後藤が照準を橋に合わせる。すると上のほうから鷹波が降りてくる。

「来たぞ、奴等の戦力が橋を通過している時にやるぞ」

「了解！」

やがて天崖の予備戦力である部隊が橋に到着して、石橋を渡り始める。

「悪く思つなよ……南無！」

カール・グスタフを発射させ、橋の柱を押し折り、次の弾をセツトすると同時にとどめを刺す。

崩れた橋からは、敵の兵士がつづぎと下の流れの激しい川に落ちて溺死するものもいれば、運良く岩につかまったものもいる。

「作戦成功だ！引き上げるぞ」

水遁の術で水を操りながら戻っていく。

この戦闘によって土と雲の国は全面降伏し、火の国は勝利を収めた。多額の賠償金を獲た火の国の財政は良くなり、軍事活動や自衛隊への援助資金がでた。

あの戦闘から1週間が過ぎた。戦後処理がすんで火の国の内部で戦勝による大規模なパレードが始まった。

「火の国万歳！火の国無敵！」

パレードには自衛隊の車両も参加した。手を振る観衆に向かって手を振り返す。このパレードは戦で敵の忍を影で歯止めした木ノ葉の里の忍をたたえるものでもあり、自衛隊を祝福するものでもあった。

御前の前で自衛隊最高責任者である伊瀬が桜華に敬礼をして座り、その隣には津波も同席していた。

「先の戦でのおぬしたちの戦いぶりは見事であった！これに懲りたらもう他国も我等に戦を仕掛けることもなかるう」

上機嫌の桜華は、2人の前に酒や料理が乗っている膳を出す。

「ときに津波殿よ、お主は忍の中でも飛びぬけた才能と力がある。

よってここに進言しよう、お主は火の国の木ノ葉隠れの里の長……

……すなわち『火影』の称号をあたえる！」

この時にさいし初代火影が誕生し、後に彼の孫娘である綱手が5代目火影になることはもう言うまでもない。

「そして伊瀬殿。御主には木ノ葉での御家人となってもらおう。勿論自衛隊の存続も許そう」

「ははっ！ありがたき幸せ、感謝いたします」

こうして火の国に後の世も『白い牙』『三忍』『黄色い閃光』『コピー忍者』などといった数々の忍を誕生させて、木ノ葉は成長し続けるのであった。

忍風自衛隊

六の巻き…これぞ忍風自衛隊！（後書き）

ご愛読ありがとうございました。

今後も私の次回策に期待してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8080d/>

忍風自衛隊

2009年5月31日18時31分発行